
落穂拾い

あと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落穂拾い

【コード】

N0902P

【作者名】

あると

【あらすじ】

落穂拾いは貧農たちの権利だったそうです。

現在も手当や支援がありますね。

手続きが面倒という気がしてなりません。

収穫の季節である。

労働者たちは汗を流して、仕事に精を出していた。実りはうずたかく積まれていた。そこかしこに、収穫の山ができあがっていた。

人々の働く光景は、活気に溢れていた。

そんな中、三人の女は腰を屈めて、刈り残された実りを拾い集めていた。

畑に残された実りは、拾って持ち帰ってもよいとされている。農場主の温情だ。この辺りの慣習なのである。

彼女たちは貧農だった。働き手の少ない家庭では、生活が苦しい。日常、口に入れるものをこうして調達しているのだった。

「だいぶ、集まったわね」

「そうね。そろそろ休憩しましょうか」

「ちよつと、腰が痛いわ」

腰を伸ばした女の持つかごから、ぼとりと実りが落ちた。

「あんた、落ちたわよ」

ひとりが二の腕を拾って差し出した。

「あら、ありがと」

「そそっかしいわね」

談笑する女三人のかごの中には、様々な部位の肉片が詰まっていた。

「まったく」

一人の笑い顔が、地面を転がった。

「あら？」

「まあ」

そう言った二人の首も転がっていた。

「おや？ お前さんたちだったか」

農夫の男が大きな鎌を持ち上げて、笑顔と驚きの顔をした女を見下ろした。

「駄目でないか。ちゃんと落穂拾いの印つけてないと」

落穂拾いをするには、農場主に申請書を提出し、目印となる色つきのベストやマフラーを身につけなければならなかった。彼女たちはマフラーをつけていたが、今日の色ではなかった。

「しょうがねえなあ」

農夫は三つの首を拾い上げ、背のかごに放り込んだ。そこにはすでにいくつもの首が入っていた。

「昼休みにすっぺかな」

腕をひとつ拾い上げ、農夫はぬかるんだ農地を泳ぎ歩いた。無数の首なしをさけて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0902p/>

落穂拾い

2010年11月23日19時42分発行